

森林研究部門

原木シイタケ品質向上・発生量増加のための被覆技術の開発

(県単・国庫 平 26～29)

- 1) 被覆によるほだ化率向上試験
植菌後、被覆したほだ木の菌の伸長状況を調査した。5月初めには大きな違いが見られ、被覆したほうが菌の伸長は大きかった。
- 2) 雨除け被覆による品質向上試験
雨除けには、大きな違いが見られた。被覆しない場合、乾燥歩留まりが小さく、含水率が高い。
- 3) 冬期(乾燥期)における被覆によるシイタケ増収試験
冬季での被覆では、被覆の効果により、色合い・形がよくなるととき、水分が多く黒っぽくなる場合があり、被覆スケジュールが難しいことが判った。

(柳本和哉)

ヒノキ丸太の乾燥方法とチップ管理方法の確立

(県単 平 29～30)

11月と2月に伐採したヒノキから樹皮つき、はく皮や割材などをした2mまたは3mの丸太を調製し、含水率の動態調査を行っている。また、チップの保管状況別の含水率の動態調査では3試験区を設定して調査中である。

(溝口哲生)

ハラン林間栽培における切り葉切り葉の品質向上技術の開発

(県単 平 29)

県内ハラン林間栽培地において、斑入りと青をそれぞれ2～3株を残して周囲のハラン全てを掘り取った。また、斑入りだけを残して青を全て全刈りした試験地を設定し、今後の生育状況を調査することとした。

掘り取ってきたハランを遮光率等の条件を変えて植木鉢に植え替えてハウスで育成し、今後経年変化により青葉化するのか、またそれは何年目からなのか調査することとした。

(葛島祥子、古村善則)

ヒノキエリートツリーのコンテナ苗生産技術の開発

(県単 平 29)

緩効性肥料の量や単肥との混合量を変えた10試験区を設定。毎月成長量調査を行い、今回の試験区における最も規格合格率の高い元肥量(「ハイコントロール 650」50g/10L)を選定した。また、各試験区の根系の発達状況を調査するため全苗木の根乾重を測定中である。今後更に別の配合量の元肥や追肥試験を行い、より高い規格合格率となる施肥条件を調査する。

(畑田梨々子)

スギ雄花着花特性検査の高度化事業

(国庫 平 29)

本事業は森林総合研究所林木育種センターより委託されている。日本海側実生スギ3本の指数評価を行った後、伐倒

し、評価を行った全ての雄花を採取、枝ごとに袋詰めした後林木育種センターへ郵送した。

(畑田梨々子)

五島ツバキ活性化対策事業

(県単 平 28～29)

- 1) ツバキにおける受粉形態別の油重量
種子の大きさと油の重量は、他家受粉が一番大きく、次に自然受粉、自家受粉となる。油を多く採取したいならば、他家受粉が有効であることが判った。
- 2) ヒノキバヤドリギの駆除適期
ヒノキバヤドリギの種子の飛散は10月頃には始まり11月中旬にピークを迎えるため、ヒノキバヤドリギの駆除は種子飛散の始まる10月までに行う必要がある。
また、10月にツバキの幹に付着した種は翌3月に発芽することが判った。
- 3) ツバキ油保存技術・搾油技術等の技術移転
マニュアルを作成し、報告会を開催した。アグリビジネスフェアでは、各種ツバキ油を展示し、深煎ツバキ油のサンプルを配布した。

五島のツバキ油関係者には、油の特性や保存方法、簡易判定方法など一定の理解が得られたので、今後とも普及活動を続けていく必要がある。

(田嶋幸一、古村善則、柳本和哉)

森林情報解析

(県単 平 27～)

地域森林計画を樹立する森林計画区において、当年と5年前の2時期の衛星画像を用いて植被率の変化を解析し、新たに発生した森林伐採地を抽出した。

平成29年度は県北森林計画区で抽出した森林伐採地の位置情報を森林地理情報システム(GIS)で取り込める形式のデータとして作成し、林政課に報告して調査業務における現地調査の効率化を図った。

(古村善則)

早生樹現地適応化試験

(県単 平 29)

県内で既に植栽されている早生樹のセンダン7箇所、キリ2箇所、モリシマアカシア1箇所、計10箇所を調査した。この内、3箇所のセンダン植栽地で土壌硬度調査、土壌pH調査、EC調査を行い、良好植栽地と不良植栽地を比較したが、差はなかった。貫入式土壌硬度計の最大貫入深は水田跡が最もあさかった。県営林目代団地にセンダンなど早生樹7種を植栽した。

(清水正俊)

優良種苗確保対策

(県委託)

林業用種子の発芽検定を行った。結果は以下のとおり。

表1. 発芽検定の結果

樹種	採種年度	発芽率	1,000粒重	備考
		(%)	(g)	
ヒノキ	H29	9.0	2.18	
スギ	H29	10.5	3.88	
クロマツ	H29	79.3	14.99	

(畑田梨々子)